

開催日： 令和6年12月5日(木) 天候 晴	開催テーマ： 富岡の古刹巡りと長昌寺住職のお話し
開催場所：横浜市金沢区	記入者：松崎 寛
参加人数：27名(会員24名、準会員1名、ビジター2名)	
実施内容(実施の項目、方法、効果・成果、宿題 など)： コース：京急富岡駅(集合)―旧川合玉堂別邸(二松庵)前―慶珊寺―直木三十五文学碑―長昌寺(住職のお話・昇堂)直木三十五の墓)―富岡総合公園(県警第一機動隊脇)―浜空神社跡―鳥見塚バス停(解散) 京急富岡駅で受付し、旧川合玉堂別邸(二松庵)に集合した。まずは慶珊寺に向かう。 花翁山(カガツ)慶珊寺、真言宗御室派、本尊は大日如来。江戸時代の初め寛永元年(1624)富岡の地頭、豊島明重(1578~1628)が両親の菩提を弔うために建てた。山号・寺号は、両親の法名からとったもの。横浜開港後、ヘボン博士が滞在時に掲げたという門札が残されている。昭和20年6月10日の富岡駅空襲による犠牲者の供養塔が山門に入って右手にある。 慶珊寺横の坂道を上り、直木三十五の文学碑と直木邸跡に行く。直木三十五(1891~1934)は大正末期から昭和初期にかけて活躍した大衆文学作家。代表作は、幕末に起きた薩摩藩のお家騒動を描いた『南国太平記』。旧直木邸の入口脇に建てられた『芸術は短く 貧乏は長し』の文学碑は、直木三十五の随筆『哲学乱酔』の中にある『恋は短く 貧乏は長し』の「恋」を彼らしい言葉として「芸術」に置き換えたもの。旧直木邸は直木が自ら設計して、玄関を造らず小さな通用口から出入りするなどユニークな造りであった。平成23年6月、旧直木邸は老朽化により取り壊された。 続いて長昌寺へ。山号は富岡山(トミカガ)、臨済宗建長寺派、本尊は釈迦如来。住職のお話を聞く。天正2年(1574)5月2日、郷土であり小田原北条氏の家臣であろう柳下豊後守が、亡き妻の菩提を弔うために、鎌倉の明月院から仙溪(セツイ)和尚を招いて創建した。創建年月日まで書いた文書が残っている。長昌寺という名は、夫人の法名「桂窓長昌大姉」に由来する。 昭和50年に直木三十五の17回忌の法要が行われた。その当時の色紙や原稿を展示していただいていた。色紙には里美淳、久米正雄、大佛次郎、池島信平等の錚々たる人達がならんでいた。原稿は、直木三十五の破天荒なイメージと違い繊細な字であった。その翌年から直木三十五を偲んで「南国忌」が始まった。毎回、作家や編集者等の講演が行われている。昭和57年、資金を集め、崖の上にあったみすばらしい墓を立派な墓にして現在地に移す。本堂のなかに、直木賞の歴代受賞者名の額があった。直木賞ゆかりの寺とは知っていたが、この額があるとは知らなかった。 直木三十五の墓の隣に胡桃沢耕史(作家、「翔んでる警視」シリーズなど)の墓がある。住職にはここまで案内していただく。3度直木賞に落ちた後、彼が住職のところきて、直木三十五の墓の隣が空いているので、そこに自分の墓を建てたい、と。ただし、「万斛(ばんこく)の恨みを飲んでここに眠る」という碑を建てたい。万斛は、はかりきれないほど多い分量のこと、だそうだ。敬愛する直木三十五の名のついた賞がどうしても欲しかったのであろう。住職も、これはどうかな、と思ったが、許したそうだ。そうしたら、翌年直木賞を取ってしまった。結果、この碑は建てずにすんだ。 富岡は、埋立前は風光明媚の海岸線をもち、明治の初めには政治家等の別荘地であった。歩いている途中、田中不二麿(司法大臣等)や三条実美(太政大臣等)の別荘跡の案内があった。 富岡総合公園の脇にある県警第一機動隊の倉庫は、昭和11年(1936)開設の日本初の飛行艇部隊である横浜海軍航空隊の第三格納庫であった。その航空隊は昭和17年(1942)8月ソロモン諸島ツラギ島で玉砕。航空隊守護神として浜空神社があったが、神社を護ってきた「浜空会」の会員の高齢化により、平成20年(2008)に追浜の雷神社に遷座。また、当時の若い隊員によって植樹された桜が、「元横浜海軍航空隊門」と表札のある元航空隊石門のそばに数本残っている。 鳥見塚バス停で解散、バスで帰途についた。	
参加者の状況・意見など 長昌寺住職のお話に、皆さんは、関心深く、聞き入っていた。初冬の穏やかな天気の中、富岡の街や富岡総合公園を歩き、直木三十五に想いを馳せ、探訪を満喫できた一日だった。	
次回の予定： ・開催日：令和7年1月10日(金) ・集合場所：JR北鎌倉東口 ・テーマ：建長寺をじっくり拝観	